

平成8年度厚生省心身障害研究
「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」

青少年に対して行う性教育はいかに進めるべきか
(分担研究：女性からみた妊娠、出産に関する研究)

分担研究報告書

分担研究者 北村 邦夫 (日本家族計画協会クリニック)
研究協力者 家坂 清子 (いえさか産婦人科医院)

1 目的

近年、青少年の性行動の低年齢化・加速化は、その望まない妊娠と性感染症の増加によって大きな社会問題となりつつある。彼等の生涯を支える健康の基盤が、これらの問題によって脆弱化されることのないよう、性に関する自己決定力を育む性教育を研究し、実践する。また、性教育の多くは、学校教育のなかで行われているため、在学期間の短い「中卒・高校中退」の青少年たちは、性教育を受ける場を失っている。乏しい性情報の中で性行動を性行動を活発化させている彼等の実態を分析し、彼等に対する性教育をいかに進めるべきかを個別相談活動やアンケート調査によって研究する。

2 研究方法

①平成8年4月より平成9年3月までに、小学校7校、中学校7校、高等学校26校、短大1校において性教育の出張講演を行った。このうち、高校生に対して行った講演の内容を文書にして報告する。

②平成7年度厚生省心身障害研究班が行った十代の妊娠した女子に対するアンケート調査の中から、「中卒・高校中退」女子のデータに焦点を当てて分析を行った。

③「中卒・高校中退」とほぼ同等の環境にある定時制高校において、個別相談活動とアンケート調査を行った。

3 結果と報告

①学校における性教育の実践報告と考察

高校生への性教育 (講演要旨)

1 思春期と二次性徴

高校時代は思春期後期、二次性徴の完成期である。母親の体内において一次性徴によって形成された生殖器が、生殖という本来の性機能を発揮すべく成熟する時期に当たる。この時期に起こる身体的現象の最たるものは「射精」と「月経」である。これ以外の身体的変化は、「毛深さ」や「乳腺の発育」などのように、いずれの性にも一過性に出現することがある。また、この時期には精神的にも性に関わる大きな成長が認められる。その一つに「性自認」がある。

人は受精時に生物的性別が、出生時には外性器の形状によって法的な性別が決定される。思春期になると生物的性別に従った身体の成長が始まるが、これとは別に精神的に自分自身が生きて行く上で望む性別、すなわち社会的性別を認識するようになる。これが「性自認」である。時には生物的性別と社会的性別が一致しない場合もある。このような場合は、本人に社会的性別を自らの性として選択する自由と権利が与えられるべきであろう。「性自認」が明確になる頃には、異性への関心も高まってくる。

2 性的欲求から性行動へ

二次性徴による心身の性的成熟が進むと、これらが相まって性的欲求が起こってくる。異性の体に触れたいという「異性接触欲」や「キス欲」「性交欲」などである。これらの欲求を満たすためにとる行動を性行動と呼ぶ。心身の性的成熟から性的欲求が生まれ性行動をとるようになるという一連の流れは、“種の保存の法則”に従う生物として当然のことであり、生物としては“優等生”であるとも言える。しかし、人間は社会性を持つ生物であるため、マスターベーションのような個人的性行動はともかく、他者との関わりを持つその他の性行動においては、欲求をそのまま行動として現すか否かを自己決定する必要に迫られることが多い。最近では、高校生でも性行動を起こすことを選択する人が増えてきた。

その結果、主に性交を持つことによって生じた様々な悩みや問題を抱えて、産婦人科を訪れる人が多く見られる。性交から起こる問題の大部分は望まない妊娠と性感染症である。

3 望まない妊娠

現在の日本では、望まない妊娠は人工妊娠中絶術、いわゆる「中絶」を受けて、妊娠を終結させることが多い。特に高校生の妊娠は、本人がその後も在学しようとするならば、そのまま産めない妊娠ということになる。これはすなわち中絶を受けるということの意味している。しかし、基本的な知識として知っておいてもらいたいことに「異常妊娠」がある。妊娠は全てが正常であるとは限らない。特に「子宮外妊娠」は、珍しくなく見られる異常妊娠の一つである。これは発見が遅れると腹腔内で大出血を起こすこともあり、早期の診断が必要とされる。最近、妊娠の有無が市販の検査薬でできるようになったが、妊娠と分かってもそれが正常か異常かまでは判断できない。妊娠が判明したら、その後の対応はともかくとして、まず異常妊娠でないことを確認するためにもなるべく早く産婦人科を受診したほうがよい。

4 人工妊娠中絶

人工妊娠中絶は、妊娠の時期によって全く異なった2種類の方法がとられる。妊娠の初期、つまり妊娠11週までは子宮の内容物を吸い出す、あるいは掻き出す手術であり、比較的短時間に終わる。麻酔による異常や手術後の合併症などが避けられれば、最近では後遺症を残すことも少なくなった。一方妊娠中期、妊娠12週からは、胎児が大きくなるためほとんど分娩と同じ過程を人工的に経過させて中絶することになる。

これはいわば「小さな出産」であり、時間もお金もかかる上に女性の体への危険性も増す。また、中期の中絶には社会的な責任も生じ、公の機関に「死産届」を提出し、胎児を火葬に付す手続きを取らねばならない。しかし、中絶によって引き起こされるこれらの身体的、経済的負担以上に見過ごせないのは、心理的な負担や後遺症である。妊娠に続く出産や育児が、女性の生活を成り立たせない危険があると判断して受けた中絶であっても、やはり精神的には罪悪感や喪失感を引きずることになりやすい。これは想像以上に長く女性を苦しめることになる。また、中絶という事実の受け止め方は、当然のことながら男性と女性の間には大きな違いがあり、このギャップが二人の人間関係の崩壊につながることもすらある。

5 避妊とその実行

このような現実の中で苦しむ女性を見ていると、とにかく望まない妊娠を避けることが何より必要であると思える。幸いなことに、人間は遠い昔から「避妊」という技術を進歩させてきた。これは、妊娠の成立過程のどこかを人為的に阻止することである。しかし今の日本では、ほとんどの高校生が避妊法のいくつかは知っていると思えるのに、望まない妊娠があとを断たないのはなぜだろう。性交を持った高校生に対するアンケートでは、70%以上の人々が「避妊している」と答えてい

る。けれど不思議なことに、妊娠した高校生も60%以上が「避妊した」と答えている。結局、“しているつもり”だけの避妊が多いのではないだろうか。避妊は、“種の保存の法則”に逆らうものであるから、成功させるには確実な実行が必要である。特に性交という興奮状態の中で行おうとする方法であるならば、余程の覚悟と注意が要求される。そこではカップルの互いの協力が必要となり、避妊の実行には、その人間関係のありようが色濃く反映してくる。

6 男女の関係性と避妊

男と女は、本来、基本的人権という意味では平等の関係にある。幸せに生きようとする権利、健康に生きたいと願う権利において、平等のはずであり、またその二人が恋愛感情を持ったとしても、やはりその関係は変わらない。そして恋愛感情が高まり、性的欲求から性交に至ったとしても、一方的な暴力の元で行われた性交でなければ、その行為については平等であり、同等の責任があると言える。ところが、この性交が終わると同時に、それまで平等であったはずの男女のバランスは幻のものとなり、大きく崩れることになる。異常妊娠をも含む「望まない妊娠」という危険を女性だけが負わなければならない男女の性機能の違いによって。このとき避妊はどういう意味を持つか。

男性にとって避妊とは、愛する女性が一方的に負わざるを得ない危険から彼女を守ろうとする。まさに最低限の男の誠意、愛情の表現と言えないか。性交に際して、避妊に関する十分な検討と協力が行えない男性は、相手の女性に対する思いやりに欠けているところがあるのではないか。女性はそのことをしっかりと見極める必要がある。また女性にとっての避妊とは、自分の心身の健康をより良い状態で守ろうとする意志の現われであるはずである。女性がこの意志を明確に持てないのであれば、結果として妊娠し辛い思いをすることになって止むを得ないと言えよう。そして更にそのカップルの間にとっても、望まない妊娠をめぐるトラブルによって大切な二人の関係が悪化することがないよう、避妊はどうしても欠かすことのできないものである。避妊の相談もできないのであれば、たとえ愛し合っている、まだ性交を持つ時ではないと考えるべきであろう。

7 性感染症

性交によってもたらされる可能性のある問題のもう一つは、性感染症である。最近、若者達の間には急速な感染の広がりを見せているものとして、クラミジア感染症が挙げられる。これは感染初期には女性の子宮頸管や男性の尿道や膀胱に留まっているが、感染が進むと女性では子宮内膜炎や卵管炎、腹膜炎を、男性では副睾丸炎などを起こし、将来不妊症の原因となることもある。感染初期には無症状であるため、自覚のないままにパートナーに感染させてしまうことも多い。また、出産のとき新生児に感染させる可能性もある。

今後の流行が心配されているエイズは、元来感染力の弱い HIV が病原体であるが、クラミジアなどの感染によって抵抗力の低下した組織からは感染しやすい。性感染症の予防は、コンドームの着用しか方法はないが、コンドームによる避妊の失敗率が12%に上ることを考えれば、これによって確実に感染症を予防できるとも言えない。

8 性行動の自己決定

望まない妊娠を防ぐ確実な避妊は難しく、性感染症の予防も不確実なコンドームしかないとするれば、やはりこれらの問題を生み出す元となる性行動について考えてみる必要がある。すなわち、どのような性行動が危険であるかを判断する力が、自分の心身を犯す危険から身を守る最も大切なものとなる。性行動の選択や判断は、その場において自分自身で下さなければならないことが多い。今すぐに必要ではないと考えている人でも、一生の間には必ず性行動に関わる自己決定を迫られる機会があろう。その時のためにも、日頃から性に関わる学習が不可欠である。

11 性情報

性について学ぶためには、その知識の源となる性情報が必要となる。性に関わる情報というと、現代の日本においては、ポルノグラフィの類が圧倒的に多い。しかし、ここで描かれている性の姿は快楽性に偏ったものであり、登場する女性もその身体や性的演技が誇張されたものである。性的欲求の高まりから起こる緊張状態をコントロールするために時として必要なものではあるが、性そのものや女性に対する偏見を育ててしまう可能性も持つものとして認識しておく必要がある。

12 君たちの未来を大切に

思春期は、人の一生の中で最も輝いた時代として振り返られることが多い。人を恋い、人を愛することを知り始める時だからであろう。しかし、だからこそ傷つくことも多い。これからの人生でも、性に関わることでつまづき落ち込むことが必ずある。失恋も中絶も人間関係の破綻も珍しいことではない。そんな時でも、いつかは立ち直るといふ強さを忘れないで欲しい。君たちの未来が、健やかで幸せであることを心から願っている。

考察

1 性教育では、性意識や性に関わる自己決定力を養う教育と避妊や性感染症予防のための実地指導などが必要とされる。そして近年のように性行動の低年齢化が進んだ状況のなかでは、日常生活に直結した実地指導への期待が大きくなってきている。しかし現在行われている性教育講演は、百人単位の集団教育が多いため、実地指導を行うには不適當である。今後は、性の概念を伝える教育の上に立って、更に実際的な避妊や性感染症予防技術を少人数に対して指導する機会を増やす必要がある。

2 少人数に対する指導を行うためには、その実践を外部講師に依頼するだけでなく、一般の教師たちも担当することができるよう、教師に対する教育も必要となる。彼等は教員養成過程に性教育講座がなかったためか、性に関する知識に乏しく、指導力を持たない。一般の教師が性教育を学ぶことは、思春期の生徒たちとの対応にも必ず活かされるものと考えられる。

②妊娠した「中卒・高校中退」女子の実態分析

はじめに

平成7年度厚生省心身障害研究班は、「10代の望まない妊娠防止対策に関する研究」の一環として、妊娠した10代女子の生活背景や性意識、性行動を知るためアンケート調査を行った。

その調査結果の中で、「学歴」の項目に今回初めて加えた「高校中退」と、またほぼ同等の学歴とも考えられる「中卒」の占める割合が予想以上に高いことに注目している。

すなわちこの人たちへの対応が、「10代の望まない妊娠防止」のための一つの重要なポイントになるであろうと推察する。そこで、この「高校中退」と「中卒」とに焦点を当て、その実態を描出することを彼等への対応を考える第一歩としたい。

調査結果と考察

10代未婚妊婦のなかに占める中卒・高校中退者の割合が高い

平成7年度の高校進学率は、全国平均96.7%であるから、中卒率は3.3%となる。また、高校中退率の全国平均は不明であるが、著者の居住地である群馬県では、全日制・定時制公立高校からの中退率は2.1%で、「中卒・高校中退」の率は、約5~6%と推計される。

しかし、産科医療機関で妊娠と診断された10代女子の中では、「中卒・高校中退」が27.6%に上る現実がある。

この数値こそ、「中卒・高校中退」にこだわって分析しようとする根拠である。

以下、「中卒・高校中退」117人(A群)とその他の学歴「高校生・高卒・大学生・専門学校生」307人(B群)を必要に応じて対比させながら検討する。

家庭環境が寂しく、経済的に不安定

彼らの同居家族を父母を中心に表した(表1)。父母との同居率は、いずれの学歴でも低く、特にA群の父母同居率38.5%は、一般の同居率

92.8%に比して驚くほど低値であった。逆に、父子・母子家庭率は一般より4~5倍高い。

また、A群は就職可能な状態にあると考えられるが、その44.4%は無職であった(表2)。これは同様に就職可能な「高卒」の無職率13.2%より明らかに高い。

(表1)

家族	A群 (%)	高校生	高卒以上	一般*
父母同居	38.5	67.6	61.9	92.8
父子	5.1	2.7	2.0	0.9
母子	22.2	17.1	10.4	5.2
父母共非同居	17.1	4.5	18.6	0.1

*内山絢子：女子非行を考える

またアルバイトも28.2%と無職について高率であり、彼等の経済的基盤はかなり不安定であることが窺える。

相手の男性も自分と同学歴が多く、無職率も高い

(表2)

職業	A群 (%)	高卒
無職	44.4	13.2
アルバイト	28.2	29.8
家業	7.7	3.3
会社員	5.1	44.6
他	14.6	9.1

相手の学歴は、A・B群全体における「中卒・高校中退」が34.0%。妊婦自身の「中卒・高校中退」27.6%より更に高い(図1)。またA群のみでは、相手が「中卒・高校中退」は61.6%に上り、これらの男子の性行動も今後、注目されるべきである。相手の無職率は6.0%。相手を「中卒・高校中退」に限れば9.7%である。「本人相手共に無職」というカップルも5.1%ある。B群の相手の無職率は5.0%、相手を「中卒・高校中退」に限っても無職率は1.6%に過ぎない。本人との関係は「婚約者」として認識している人が多い。本人は在学しておらず、結婚も考えられる状況にあるためであろうか。これが後に述べる、いわゆる“駆け込み婚”や出産希望率の高さに関連しているとも考えられる。

初めての性交経験(初交)が早い

(表3)

19歳の人の初交年齢	経験率 (%)	
年齢(歳)	A群	B群
13	8.1	0.6
14	16.2	1.9
15	32.4	15.1
16	37.8	18.2
17	2.7	31.4
18	2.7	20.8
19	0	11.9
16歳までの累積経験率	94.6	35.8
平均初交年齢	15.2歳	16.9歳

初交年齢の分布をより詳しく知るために、最高齢の19歳を抽出した(表3)。

結果はA群では「16歳」37.8%がピークで、17歳からは激減しており、また、16歳の累積初交経験率は94.6%に上る。平均初交年齢は15.2歳である。B群でのピークは「17歳」、16歳の累積率は35.8%に過ぎない。平均初交年齢は16.9歳で1.7年の開きがあった。

また交際開始から初交までの期間では、「1週間以内」が全員16歳以下であり、17歳から初交に対して慎重になる傾向が表われている(表4)。初交時の態度の上位はA群では「何となく」43.9%、「好奇心から」25.4%、「わからない」19.3%であり、この3項目で89%を占める(表5)。B群に比して「好奇心から」「わからない」が高く、「無理やり」「お酒を飲んで」はかなり低かった。

(表4)

初交までの期間	A群の初交年齢 (%)					
	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳
1週間以内	30.0	23.1	28.6	22.9	0.0	0
1カ月以内	20.0	26.9	31.4	42.9	42.9	0
1~4カ月	30.0	26.9	20.0	22.9	14.3	100.0
5カ月以上	20.0	19.3	20.0	11.5	42.9	0

(表5)

初交時の態度	A群 (%)	初交時の態度	B群 (%)
何となく	43.9	何となく	40.9
好奇心から	25.4	お酒を飲んで	20.1
わからない	19.3	好奇心から	19.5
希望した	6.1	無理やり	15.1
無理やり	4.4	希望した	2.3
お酒を飲んで	0.9	わからない	2.0

性的快感と性行動の積極性との相関関係

性的快感が「ある」と答えた者は40.5%、B群でもほぼ同率である。A群で初交年齢16歳以下の人(90%以上が含まれる)に限れば、初交年齢が低いほど性交によって性的快感を得ており、初交年齢が上がるほど「わからない」が増える(表6)。

また「快感あり」は、初交時の態度が「希望した・好奇心から」という積極派では半数以上(55~57%)に上り、「何となく・わからない」などの消極派では半数以下(0~40%)であった(表7)。

(表6)

快感の有無	初交年齢 (%)			
	13	14	15	16
ある	60.0	53.8	37.1	25.7
ない	10.0	3.8	14.3	11.1
わからない	30.0	42.3	48.6	62.9

更に初交までの期間との関連を見ると、「1週間以内」では51.9%が「快感あり」と答え、「これ以上の期間」より明らかに多い(表8)。

(表7)

快感の有無	初交態度 (%)					
	希望した	好奇心から	無理やり	何となく	わからない	お酒を飲んで
ある	57.1	55.2	40.0	39.2	21.7	0
なし	14.3	10.3	0.0	9.8	13.0	100.0
わからない	28.6	34.5	60.0	51.0	65.2	0.0

過去における平均性交人数はA群で5.8人。B群の平均人数3.7人とは2.1人の開きがある。またA群の「快感あり」の平均性交人数は6.8人、「なし」は3.9人と両者間には2.9人の大差があった(表9)。

性交頻度(妊娠直前1カ月間の性交回数)について「忘れた」38.4%が最も多かったが、これを除くと「2~5回」が35.8%、「6~9回」が15.2%、続いて「10回以上」も8.9%ある。そして、10回以上の方は5回以下の人に比して性的快感を自覚している率はかなり高い。

(表9)

	平均性交人数 (人)	快感の有無 (%)		
		ある	ない	わからない
A群	5.8	6.8	3.9	5.4
B群	3.7	4.6	3.0	3.2

これらの結果から彼等の性的快感の獲得は、初交年齢・初交までの期間・初交時の態度などに見られる「性行動への積極性」と相関関係があり、更にその後の性交人数・性交頻度のような「性交経験の蓄積」による相乗効果としてもたらされていると言えようか。

(表8)

快感の有無	初交までの期間 (%)					
	1週間以内	1カ月以内	1~4カ月	5~8カ月	9~12カ月	1年以上
ある	51.9	34.2	35.7	50.0	66.6	16.7
なし	11.1	7.9	10.7	8.3	33.3	33.3
わからない	27.0	57.9	53.6	41.7	0.0	50.0

これは、十代の女性と言えども、性行動における快楽性という面では成人女性と同様であり、同等に考えられるべきで存在であることを示している。

性教育を受ける場を失っている

性教育をどう認識しているかは定かではないが、初経以外の性教育を「受けた」と思っている人は53.8%、B群の75.6%に比してかなり低率であった。

「受けなかった」人に対する“受けたかったか”との問いかけでは、「受けたかった」36.0%に対して「どうでもよい」

(表10)

性教育	A群 (%)		B群 (%)
	中卒	高校中退	
受けた	52.4	55.6	75.6
受けない	44.4	40.7	24.0
うち 受けたかった	42.9	27.3	51.4
どうでもいい	17.9	31.8	14.3
必要ない	3.6	0	2.9
わからない	35.7	40.9	31.4

24.0%であり、性教育願望は低く、投げやりな傾向が感じられる。

しかし、「中卒」と「高校中退」に分けて見ると、前者では「受けたかった」が42.9%「どうでもよい」は17.9%、後者では「受けたかった」27.3%より「どうでもよい」31.8%の方がやや多く、「中卒」の方が性教育を望んでいることがわかる（表10）。

受けた場所はいずれも「学校」が突出していることから、学校に在籍した期間が短かった彼等が、性教育を受ける場を失っている現実は明らかであろう。

避妊実行率と避妊法の選択に問題あり

A群で今回の妊娠周期において避妊行動をとっていたのは「いつも」「時々」を合わせて55.6%。

しかし回答者は妊娠しているのであるから、“していたつもり”の避妊であったと言えよう。B群の避妊実行率は、68.2%である。

(表11)

避妊の有無 (%)	初交までの期間						(空白)	総計
	1週間以内	1カ月以内	1~4カ月	5~8カ月	9~12カ月	1年以上		
いつもした	7.4	10.5	14.3	8.3	0.0	16.7	0.0	10.3
時々した	37.0	52.6	42.9	50.0	66.7	33.3	33.3	45.3
しなかった	55.6	36.8	42.9	41.7	33.3	50.0	66.7	44.4

避妊を「しなかった」44.4%は、B群の1.4倍に相当する（表11）。

初交までの期間との関連を見ると、避妊を「しなかった」率は「1週間以内」で55.6%と最も高い（表11）。

また、性交頻度が1カ月に「10回以上」でも「避妊なし」が30.0%にも上っている。

選択されている避妊方法は、「コンドーム」88.9%と「膈外射精」11.1%だけである。B群でもこの二者で95%を占めるが、「殺精子剤」「オギノ式・BBT」もわずかながら選択されている。

(表12)

避妊法 (%)	A群避妊実行者の初交までの期間					
	1週間以内	1カ月以内	1~4カ月	5~8カ月	9~12カ月	1年以上
コンドーム	75.0	87.5	93.8	100.0	100.0	100.0
膈外射精	25.0	12.5	6.3	0	0	0

また、初交までの期間が長いほど「膈外射精」より「コンドーム」を選択する率が高くなっている（表12）。

初交に対する慎重さや相手の男性との人間関係の深まりが、不確実な方法は選択しないという行動に現われていると思われる。今回初めて加えた市販検査薬の使用率はA群72.6%で、これはB群では更に高く83.6%に上っていた。避妊に対する認識は高くないが、妊娠を自己診断しようとする態度は、もはや“常識”となっているようだ。

中絶経験・反復妊娠が多い

過去の妊娠経験が「ある」のはA群で27.2%。最多回数は「2回」7.9%であった。B群での妊娠経験者は16.7%、「2回」以上は2.6%で、最多回数は「3回」である。

A群の中絶経験者は25.7%であるが、年齢別に見ると17歳から18歳の間で急増があり、19歳では44.7%にまで達し

(表13)

年齢 (歳)	15	16	17	18	19
中絶経験 (%)	0	10.0	6.1	29.0	44.7

ている（表13）。B群でも17歳から18歳間に同様の傾向はあるが、19歳でも経験者は19.9%に留まっている。中絶経験は性交頻度と関連しているらしく、この増加に連れて経験率は上昇しており、「10回以上」では40.0%に上る（表14）。

頻度が「10回以上」でも避妊していない率が30.0%あったことを考えれば、当然の結果とも言えよう。

(表14)

直前の性交回数	1回	2~5回	6~9回	10回以上
中絶経験 (%)	0	16.2	35.3	40.0

また、中絶経験者の避妊実行状況を見ると、「時々した」で中絶経験率が非常に高い（表15）。これはB群においても数値の差こそあれ同様に認められる。「時々した」という避妊の不確実性がここに現われているようだ。

中絶経験者の避妊法を見ると、妊娠を繰り返している人ほど「膈外射精」を選択している率が高く、「コンドーム」の使用率が低くなっている（表16）。

中絶の経験は避妊法の選択には活かされおらず、逆に不確実な避妊法を選択する傾向が、反復妊娠を招いていると言えようか。

(表15)

避妊の有無	いつもした	時々した	しなかった
中絶経験 (%)	A群 18.2	32.0	21.2
	B群 10.6	18.9	14.4

出産希望率が高い

A群の分娩予定者は18人（15.4%）。ほとんどが「子供が欲しいから」と答えており、うち入籍予定は66.7%である。在学していないという点で同じ状況にある「高卒」での分娩予定は3.6%であった。この挙児希望率の高さの背景には、前述のような家庭環境の寂しさが影響していると思える。10代未婚妊娠のもつ問題点が、結婚することによって解決されるとは思えないだけに、たとえ結婚・出産に漕ぎつけたとしてもその後の生活には懸念が残る。

(表16)

過去の中絶回数	避妊法 (%)	
	コンドーム	膈外射精
0	93.0	7.0
1	83.3	16.7
2	66.7	33.3

付記：今回検討対象からはずした10代既婚妊婦109人（入籍日、最終月経明記は88人）も、うち75人（68.8%）は妊娠判明時に未婚の、いわゆる“駆け込み婚”であった。この中には「中卒・高校中退」が55人（72.4%）含まれている。本来の既婚者12人もそのうち8人が「中卒・高校中退」であった。

今後の対応

今回焦点をあてた「中卒・高校中退」者は、学校でも職場でもなかなか会えない、問題を抱えて初めて現われてくる人たちである。この人たちとどこで接触できるのか、どのように働きかければよいのか、その対応を考えると戸惑うばかりである。しかし、この調査の詳細は未だ検討途上ではあるが、これらのデータを見ていると我々は彼等に対して何らかの行動を起こすべき必要を感じる。

その一つの試行として、定時制・通信制高校の生徒たちを通じて、彼等の友人たちへのアプロー

手を始めてみた。現在の定時制・通信制高校には、小・中学校での長期不登校者や高校中退後の再入学者が多く在籍しており、その友人にも「中卒・高校中退」が多い。ここをフィールドとして、彼等を中心に据えた調査や相談活動を続けることによって、何か突破口が開けるかもしれないと考えている。

おわりに

学歴偏重、経済優先社会を是正すべき時期にあつて、殊更に学歴によって人を分類することには抵抗がある。しかし、彼等が望まない妊娠によってさらに苦境に陥ることのないよう、このデータを実際的な支援行動を考える足掛りとすることを誓って、彼等に非礼を詫びたいと思う。

一平成7年度厚生省心身障害研究一

分担研究者：北村 邦夫

協力研究者：片桐 清一・真井 康博・長池 文康・岩倉 弘毅
高橋健太郎・平嶋 仁博・柿木 成也・町浦美智子

調査対象と調査方法

全国8地域（北海道、青森、宮城、群馬、東京、島根、福岡、鹿児島）における研究協力施設の産婦人科外来受診者のうち19歳以下と21歳の者。

1994年12月から1995年12月までの13ヶ月間。

調査方法は、受診時の待合時間に本人が記入後、医師が補足記入。

比較検討対象

回収された調査票840件のうち、年齢条件に適合するもの825件。

19歳以下は541名。そのうち初診時未婚者432名、既婚者109名。

妊娠に対する受容環境をなるべく同一にするため、今回の比較対象は未婚。かつ中卒・高校中退を中心に考察するため中学生6名および学歴不明2名も除いた。

すなわち比較検討対象者は「15～19歳・未婚・学歴中卒以上」424名。

③定時制高校における個別相談活動とアンケート調査

個別相談活動

1 方法

定時制夜間部の図書室の一角に「性に関わる相談コーナー」を設けた。

毎週一回、夕食休憩時間（25分間）を利用して相談を受け付けた。

2 相談内容

短時間に限られていたため相談人数は多くなかったが、ほとんどの生徒はプライバシーにこだわらず、率直かつ明るく話す雰囲気的印象的であった。相談内容は、「予期しなかった妊娠に対する対応」や「避妊法」など実際の事柄が多く、具体的な指導を求めていることが感じられた。数か月続けるうちに、学校側（教師）が生徒指導上必要と考えた生徒を連れて避妊指導などを受けさせるようになり、教師自身も指導法を学ぼうとする姿勢を見せ始め、教師からの性教育に関する質問や相談を受ける機会も増えた。また一例ではあったが、学外の友人に関する相談を持ち込まれたこともあった。

3 相談者への対応

なるべく実地的な解決方法が取れるよう心掛けて対応した。観念的な回答では満足しない様子を感じられた。しかし、一般の高校生より基本的知識に乏しく、いわゆる「一から教える」必要があり、対応に苦慮することも少なくなかった。また同じ生徒が、毎週、少しずつ問題を掘り下げながら相談に来る事例も経験し、相談への回答だけでなく性教育そのものとして対応して行くこともできた。学外の友人については、学外で別の時間帯に直接本人と対応した。

4 今後の課題と展望

生徒たちの異性との性行動は日常的になってきており、性に関わる相談も常時受け付けられる環境が求められている。一方、定時制高校生と関わりを持つことによって、予想通り、その周辺の友人たちとも関わりをつくることができた。彼等は定時制高校生と同様に中卒や高校中退者が多く、いわゆる「ハイリスクグループ」に属する人たちである。彼等の性的パートナーも大部分が同程度の学歴であることは、アンケートの分析結果から分かっている。仲間意識の強い彼等のグループの一角と信頼関係を結ぶことは、彼等に対するアプローチの第一歩となるかもしれない。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1 目的

近年、青少年の性行動の低年齢化・加速化は、その望まない妊娠と性感染症の増加によって大きな社会問題となりつつある。彼等の生涯を支える健康の基盤が、これらの問題によって脆弱化されることのないよう、性に関する自己決定力を育む性教育を研究し、実践する。また、性教育の多くは、学校教育のなかで行われているため、在学期間の短い「中卒・高校中退」の青少年たちは、性教育を受ける場を失っている。乏しい性情報の中で性行動を性行動を活発化させている彼等の実態を分析し、彼等に対する性教育をいかに進めるべきかを個別相談活動やアンケート調査によって研究する。